

制度を読む

川中 豪
【比較政治学】

●高橋伸夫 『虚妄の成果主義…

日本型年功制復活のスヌメ』
（ちくま文庫、二〇一〇年）。

●長谷部恭男 『憲法と平和を問
いなおす』（ちくま新書、二〇
〇四年）。

●Francis Fukuyama. *The Origins
of Political Order: From Prehu-
man Times to the French Revo-
lution*. New York: Farrar, Straus
and Giroux, 2011（フリンジ
ス・フクヤマ著「会田弘継訳」
『政治の起源…人類以前からフ
ランス革命まで（上）（下）』講
談社、二〇一三年）。

もともとは法律を勉強したくて
法学部に入ったこともあり、大学
卒業後、職業として政治学に関わ
るようになってからも法律と関係
の深い政治制度論に関心をもつて
きました。今回は、一般向けの書
籍ながら深い学術的な背景を持ち、
「やっぱり制度って大切」とあら
ためて思わせてくれた本をご紹介
したいと思います。

●人を活かす制度

制度の意義や役割は、制度だけ
をみていてもわかりません。それ
は、個人や集団の行動にどのよう
な影響を与えるかを確認すること
で明らかになります。日常生活で
も学校の規則やマンシヨンの管理
組合のルールなどは、そこにに関わ
る人たちの行動に影響を与えます。
単純にいえば、こうした場で人々
の「適切な」行動を導きだす制度

が「良い」制度と考えられます。

身近な制度のなかで、組織に属
して働いている人たちにとって重
要な制度が人事制度です。それは
人々が「適切な」行動をとるよう
に、つまり、一生懸命働いて業績
をあげていくように仕向ける役割
を担っています。近年、そこに能
力や業績に応じて給与を決定する
「成果主義」が導入されています。
高橋（二〇一〇）はこの「成果主
義」を痛烈に批判しました。成果
主義は人件費抑制の口実でしか
ないとし、日本型の年功制を復活さ
せることが人々の業績を高め、企
業の成長につながると主張します。
この本のいう「日本型年功制」
は、働き手のあいだで競争があり、
格差も生まれるという点で、いわ
ゆる年功序列とは少し異なります。
その意味するところは、単純な賃
金による動機づけは意味がなく、

むしろ次の仕事の内容で報いるこ
とが重要であること、そして、働
き手が将来の見通しを立てられる
ような給与体系こそが働き手の企
業に対するコミットメントを確保
し、今をがんばることを可能にさ
せる、ということに集約されます。
この本の強みは、単なる規範的な
主張ではなく、実験や統計に基づ
いて「日本型年功制」の効果を説
いているところです。

同じ人でも人事制度のあり方次第でよく働きもすれば、職場から逃げだすかもしれない。制度の役割の大きさ、ゆえに制度を作るこ
との重大さを感じます。さらに、
制度を知ること、人を知ること
であることにも気づかされます。
人が何を求めているのか。制度に
対する人々の対応をみることで、
人の求めるものが明らかにになりま
す。翻って、それがより良き制度
を確立するヒントともなるわけ
です。

●秩序を生み出す制度

視点を日常生活から国家のレベ
ルに移すと、法律の王様、憲法が
あります。憲法の存在意義を考え
るうえで重要な立憲主義を論じた
のが長谷部（二〇〇四）です。と

いっても、立憲主義とは何か、を単に述べたものではありません。立憲主義とは「国家権力の制限だ」と定義したうえで、なぜ立憲主義が必要なのか、ということの説明をしています。ゲーム理論なども使われ、通常の法学の本のイメージからはだいたいぶかけ離れた印象を受けます。また、その議論の始め方もドキッとするものです。いわく、民主主義で決めて良いことと、決めてはいけないことがある。その線引きをし、民主主義がその境界を超えないようにするのが立憲主義の眼目である、と。「民主主義は常に良いものだ」と思っているとかなり戸惑います。もちろん、立憲主義は権威主義を推奨しているわけではありません。民主主義においても権力が手をつ込んで良い部分は限定されているのだ、ということなのです。

なぜそうなるのでしょうか。民主主義を多数決と同義としたうえで、多数決で決めてはいけないことまで多数派の意向にそって決めると秩序が崩壊するから、というのが本書の答えです。多数決で決めてはいけないことは、比較不能な価値（例えば宗教的価値）の優劣です。個人にとって捨てるこ

とのできない価値を捨てるよう少数派に強要することは、彼らの抵抗を強め、社会全体の得るべき利益を損なうこととなります。となると、民主主義の手続きが立ち入らない領域を決めておいたほうが良いというわけです。あらかじめその領域を明らかにしておけば、多くの人が安心してその政治の枠組みに参加することが期待されます。

権力が小さい方が秩序は安定する、というのは、示唆に富んだ議論です。これは人事制度で触れた「見通し」に通じる考え方です。誰が権力者になるかで物事が大きく変わるようであれば、人々の生活は不安定になります。経済活動も萎縮します。政治の役割にそれほど期待しなくても大丈夫な社会が目指すべき社会かもしれませぬ。

● 人類の歴史、制度の歴史

さらに視点を歴史的にも地理的にも大きく広げて政治制度と政治秩序の起源や発展、そしてそれが衰えていく様を描いたのが、二巻で構成されるフクヤマの著作です（Fukuyama 2011, 2014）。

かなりの大著で、読み終えるのにずいぶんと時間がかかります。

それでも、話の筋を理解するのはそれほど苦勞しません。それは、メッセージが明瞭だからです。二巻は政治秩序の基礎にあるのは政治制度だとし、その重要な柱として、国家、法の支配、アカウンタルな政府の三つを指摘します。

国家とは統治していくための機構、特に能力主義にもとづく官僚機構の確立を指し、法の支配は、立憲主義と密接に関わっていて、権力者が法に拘束されることを意味します。そして、アカウンタルな政府とは、権力者が市民の利益を優先するような政府のことで、市民の利益をないがしろにする権力者を取り除く手続きを含みます。この三つは互いに独立して形成され、そのバランスがそれぞれの国の政治秩序の状態を決めているというのが議論の核です。

制度の問題は人が何を求めるのかという問題と不可分であると述べましたが、この二巻はこの点でもおもしろい見方をしています。普通、人々は個人単位でそれぞれの利益が最も大きくなるような行動をとるという前提を置きます。これに対し、この二巻は、人間は自分の遺伝子を次世代に継承させる欲求、つまり血縁・同族への優

先的な配慮を重視すると考えます。ゆえに、政治秩序の形成は、血縁・同族的な私的人間関係を、政治制度によって公的な領域から排除する営みだとみています。

二巻が壮大な歴史を相手にしながら明瞭な議論を展開できているのは、政治制度の発展に焦点を絞っているからです。先に触れた人事制度や立憲主義などでもみられる制度と人との相互関係が歴史のなかで積み重ねられていくとすれば、人類の歴史は制度形成の歴史だったといってもよいように思えてきます。そして、それは、実のところ、人間の本性を見極めようとする歴史でもあります。

（かわなか たけし／アジア経済研究所 地域研究センター）